

の當時、すでに壯豪の大人を壓するものがあつたのだ。

呀ッと思ふ間もなかつた。大男は、刀を把る手頭を、おどろくべき強力で、振上げられてゐた。

(おのれ小癪なッ！)

たとひ偽にもせよ、自分で十三歳だといふ若ぞうに、捻られたとあつては生涯の名折れ——なんの面目があつて再び人と顔を合はされよう！

(力自慢のこの俺が！)

と、満面に朱を注ぎながら力んで見るが、全く不思議な怪力もあればあるもの——虎之助の腕は、さながら鋼鐵で出来たやうだ。

「そオれ搦め取れッ！」

と、叫ぶ聲の下。

群がる足輕どもは、虎之助に力を合はせた。

頑張る大男も、猛者ではあつたが、つひに繩を掛けられた。ちやうど其處へ、走つて来た小男は、

「チエ、不埒ぞ人の喧嘩相手を、横取りして縛ると云ふ法があるかッ？ 縛め解いて返さばよし、さも無い時は血の雨降らし、死骸の山を築いて呉れるぞッ！」

と、喚き立つた。

だが、この小男も虎之助にかゝつては敵でなかつた。

打物とつては、一人當百の勇士ではあつたが、勢ひ猛く斬り込む太刀先が、なんとした事ぞ？ 空ばかり裂いて、虎之助の身へは、一向に觸れない。焦れば焦るほど、自分の劣勢が意識される。

(酒に酔つたせゐとも思はれないのに！ まだ前髪の癖におツそろしい豪いものだ！)

と、感じた時、虎之助は、まるで前と同様に、相手の手元に跳び入つて、白刃もつ腕を、引搦んで抱へ込み、足輕どもに聲をかけてこれも繩で縛つてしまつた。

虎之助の部下どもは、

「じつに怎うも、恐れ入つたお腕前だのう」

「おらア今日まで、まさか斯うもお強からうとは思はなんだよ」

「む、人間業ぢやあないな」

「鬼神の生まれ變りツてのだらう」

「行く末は、まあ怎んな功名をなさるだらう？ 考へるだけでも愉快ではないか」

「ほんたうに何處まで出世なさるか、解らんなあ」

「ともかく狼藉者を引立てようぢやないか。お殿様はさぞかしお賞め遊ばさう。虎之助どの、お蔭で俺たちも、面目を施せる」

縄つきを引ツ立てようとすると、

「待て！」

虎之助は制して、往來から森かげへ兩人の者を、伴れて行つて、丁寧に喧嘩の理由を、訊ねるのだつた。

大男は、先づ神妙に、

「拙者こと木村又蔵と申して、二十歳——小兒の頃から流浪の身の上——」

と、語る。

それを掻い撮むと——

彼には一人の母があつて、それが重い病に臥したので、看護のために仕官も出来ず、好むわざの相撲を取つて、祝儀を貰つたり、魚鳥を獵して家計を助けてゐるのだつたが、今日は憂さばらしに思はず酒を飲みすとして、亂酔して路傍に寝たのが悪かつた。まつたく意趣も意恨もない喧嘩を、賣られたから、買つたまでだ、といふのであつた。

(十)

しかし小男の方が、喧嘩を賣つたことには、はなはだ卑しい理由があつた。

「井上大九郎と申す」

形は小兵でも、名は大九郎だつた。そして齡は二十二歳——

「いさゝか習ひおぼえし武藝をもつて、身を立ち、諸國を遍歴するうちに、多くもあらぬ路銀ゆゑ、費ひ果して軀に着くべき衣服も、失ひ、仕官を求めようにも相應しき大小も無く、切取り強盗は亂世の常とは聞きましても、町人や百姓から奪ひ取るのは不憚と存じ、困窮しながらも好きな酒、飲みつとふと見れば、六尺大の巨漢が、腰に帶せる刀、脇差、身装に似合はぬ立派やかさ。察するところ人の物を、掠め奪つたに相違なし。いざ此の浪人を打殺し、大小を我物にしてやらうと、悪念生じた浅間しさ。刀の柄に手をかけては見ましたが、酔ひ臥してゐる者を、斬殺すのは勇士の恥辱——待て、待て、喧嘩を仕掛けて闘つて、打果さうと心を決め、わざと踏み躪いて挑みましたる次第でござる」と、つゝまず白状して、

「承はれば、長濱の木下の殿にお仕へのお小姓、いまだ御少年十三歳とやら。にも拘らず、希代な御武勇——あゝ世には斯うした傑物もあり、われら如き屑の屑——と初めて目が覺めた心地で御座ります。今より驟然、性根を入れ替へ、もしお許し下さらば、虎之助殿の御家來として、犬馬の勞を竭したく——」

と、誠心を顔に現して、虎之助の郎黨に成りたいと願ふのであつた。

(これは思ひの外、正直で、淡泊な男だ。やがて初陣もするやうになれば、相當な郎黨が要るし——)
虎之助は、さう思つたが、自分は無祿の身の上だから、家來を持つても扶持が出来ないどうしたも
のか知ら——

思案したが、なんとか成るかも知れぬと、そんな氣もしたので、又蔵へは、若干の錢を恵んで、
「病んでゐる母を、大切に看護るが宜い。それは殿様が、不時の災難に會つたものや、孝行をしなが
ら窮してゐる者などへ、與へると仰しやつて、わたしにお預けなされた錢ぢや。遠慮なく納められ
よ」

と、いつた。

そして大九郎はこの場から、城へ伴れて戻ることにした。

錢を恵まれた又蔵は、ふかく感謝して、もし病める母に、壽命が盡きて、この世を去つたなら、必
ず郎従として使つて頂きたい、と頼んだものだ。

虎之助は、城内に戻ると、

「お殿様、お願ひがござりまする」

秀吉の前に手をつく。

「なんだ、願ひといふのは？」

「五百石頂けますまいか？」

「五百石、そちにか？」

「はい、わたくしにで御座ります」

「遣つても宜いが、少し早すぎるやうだな」

「決して、早すぎることは御座りませぬ」

「だけど其方に、知行はまだ要らぬ筈だがの」

「それが、要ることに相成りました」

「ほう、なんで要ることに成つた？」

「わたくしに家來が一人、出来たので御座ります」

「そちに、家來が出来たのか？」

「はい。それに二百石は、すくなくとも遣らなくては——と存じまするので」

「残り三百石が、そちの取り前といふ譯かな？」

「いゝえ、もう一人、二百石取りの家來が、近いうちに、出来るかも知れませぬので、五百石ほど頂
きたう御座ります」

赤ビロウドの陣羽織を着た秀吉は、物見臺の縁から、目の下の小谷城を、鞭の尖で指しながら、

「あの城を、攻め落すには、どうするが一番いよと思ふ？」

さう云つて、虎之助から助作、佐吉、市松と順に眺めて、

「虎、どうぢや？」

「わたくしは早速、岐阜へ申上げて、一気に乗取れるだけの軍勢が、到着次第、大手も搦め手も隙間なしに取り圍んで、力攻めに致さなければ、落城させることは難しいと存じます」

と、虎之助が答へると、

「助は、怎う考へる？」

「わたくしも大體は虎之助と同じ考へで御座ります。かやうに看張つてをればとて、あの城は、到底このまゝでは假令何年かゝらうと、落ちる筈はなからうと存じます。小谷勢は、容易に城から出撃は致しませんが、看張るだけで、圍むことをしなければ、兵糧攻めにも出来ず——やはり御援軍を乞はせられて、力攻めはお味方に死傷も數多く出ませうゆゑ、遠卷にチリ／＼と詰めて、開城を待つ

のが、最も上策かと愚考、仕りまする」

助作は、さすがに十八歳だけの考へ方をしたのだつた。

「佐吉は？」

「は。わたくしは、攻めるには及ばぬと思ひます」

「ほう、そんなら其方は、攻めずとも落城すると思ふのか？」

「はい。京都の將軍家の片が付きさへ致しますれば——」

と、佐吉が答へた。

「はツは、將軍家を片附けるか！ 思ひ切つたことを申す奴ぢや、少年の辯に太い音を出すなよ」

「でもお殿様、京都が亂の因で御座りますもの、この小谷の敵對も、將軍家があゝして在すからだと、わたくしは考へます。京都の義昭公は、武田の力を、買ひ冠つていらつしやるのです。武田さへ来て呉れれば、岐阜の館さまを、休すことも出来るみたいにお考へになつてゐるに違ひ御座りませぬ。ですから、いろんな御陰謀の企まれる京都の幕府を、斷然と岐阜の館様が、お取り潰しになりさへすれば、浅井家などは、おのづと降参なさいませうから、あの城などは、このまゝでゐても、差支へないものと、わたくしは考へます」

「ふツふ生意氣なことを申すぞ」

秀吉は、さうは云つたものゝ、内心では切かに、佐吉の慧敏な觀察が、あまりにも自分の考へとの
中してゐるのに、驚かされたのであつた。

(こいつは本當に、呆れるくらゐの伶俐者ぢや！)

さう感じながら、市松に眼を向けて、

「市は、どう思ふ？」

と、訊いた。

「わたくしですか？」

「そちは聞くもに攻めたいのだらう？」

「戦は、戦つて勝つのが、一ばん宜いと思ひます」

「わはツは、城は無二無三に、面も振らず攻め落すのが最上、といふ奴だよ、そちは」

「わたくしには、面倒なことは解りませぬが、かうして上から城を、眺めてばかり暮らすのは、ずる
ぶん退屈だといふ氣が致します」

(十二)

小谷夫人！ 浅井長政の妻は、泪をハラはらと、手紙の上にとぼした。

蘭燈の光も、しめやかに曇つて、夜はまださう更けもせぬのに、居間のぐるりは寂として物静かだ
つた。

兄信長から來た手紙は、さう長い文句のものではなかつた。しかしながら、それは彼女にとつて、
縷々千萬言にも優る情意を盡くしてゐるのだつた。

(兄上は、「おれが非か？ 長政が是か？」と仰しやる。「姉川合戦の以前まで溯つて云ふ必要は、

もう無からう。雌雄を争つて、あれほど手痛く打ち敗けたら、それで朝倉への義理は、濟んだ筈だ。

素直に信長の中原制覇を認めて——服従してもよいではないか？」さう仰しやる兄上のお言葉は、た

しかに道理ぢや。城を開けば、相違なく大和の國で、應分の替地を宛がふと、いつて下さる！)

夫人は、だが良人の心が頑なに滅亡を、覺悟してゐることを思ふと、援ひのない闇黒を感じるので
あつた。

でも、居間の襖をあけて、廊下へ出たのは、長政の寢所をおとづれる爲だつた。

ちかごろでは、夫婦は別居生活も同様だつた。もう久しく臥所を共にしないのである。

長政は、夫人のみでなく、侍女も近づけず、一切女氣ぬきの起臥しを續けてゐた。城の中にもなが
ら、まるで野陣暮しの態で、奥の館へは、足を向けようとさへしなかつた。

「市姫。また諫めに参つたか？」

長政の聲は、冷たかつた。

奥の館とは違つて、長政の座所の近くは、どこも彼所も明るく灯をともし、煌々たる光の下で、武装の儘で、人々が群れてゐた。將兵の半数は交替で、いつも睡らずにゐるのである。夜中でも直ぐ戦へるやうにといふ心構へなのだ。

「岐阜から、大和での替地のことを、申して寄越されました」

夫人が、さう云ふと、

「それで？」

長政は、白い眼で睨んだ。

「わたくしには、織田の兄の申す事に、殿がお耳をおかしあそばすのが、およろしくはないかと、さう思はれるので御座いまする」

夫人は覺えず切口上になつた。

長政の口が、とがつた。

「さう思ふなら、思ふがよい。——予は予ぢや。人の心は、各自のものだ！」

「でも、わたくしは貴殿の妻で御座いまする」

「骨肉でも、心は鈍々ぢや。ましてや夫婦は骨肉ではない。骨肉でなければ他人も他人、あかの他人ではないか？」

「まあ！ なんといふお情ないお言葉で、御座いませう？」

「情なくとも、それが眞理だ」

「いゝえ夫婦は、二世も三世も申しまするものを！」

「だが離縁離別は、戦國の習ひだぞ」

「ええ？」

美しい貌には、愁ひの暈に、ありありと恐怖の影が差した。

「離れて了へば、それまでの縁ぢや！」

「おゝ、そんなら貴殿は？」

「予は、そなたを岐阜へ、返さうと思ふのだ！」

十七箇條の諫め

(一)

「来たか」

「参上」

秀吉は、岐阜へ、召に應じて虎御前山の寨から、伺候したのである。

「猿面、なにが可笑しいのだ」

いきなり、信長が訊いたのは秀吉が、まづいきなり、にた／＼笑ったからであつた。

「あまりのお芽出度さに、われ知らず猿面が、つい綻びたらしうござります」

「なに、綻びたらしい？ そんなら無意識の笑ひか今のは？」

「おぼえず微笑まれたものと見えます」

「他人事みたいにいふのう」

「わが事みたいに胸が躍ります」

「一體なにが芽出たいのだ？」

「このたびの御上洛がです」

「誰が上洛すると云つた」

「仰しやらなくても解つてをります」

「どう割り出した？」

「かく申す猿めの参上が、二二天作の五です」

「ふツふ、妙に割り切れたといふ奴ぢや。こんどの上洛は、いよいよ將軍に對する最後の手段だ」

「すツぱりと御片附けに相成りますかな」

秀吉は、ふと此處で、石田佐吉の言葉を借用したことに、氣づいて、

(負つた子にも、淺瀬を教はる。この間、佐吉めが、將軍を片附けると云ひをつたが——)

と、思つた。

信長は、點頭して、

「む、片附けるよ」

この語が、すくなくからず意に叶つた。

「時機が熟したからな」

「まったく自業自得ですけれど——考へて見ますと、將軍もお氣の毒で御座りますよ」

「氣の毒なものか、あれこそ骨絡みの、癒さうにも治りツこない慢性の、陰謀症患者だよ。あんなのは、どうしても一度は灰になつて、新規に生れ變りでもしないことには、駄目なのだ」

「ですからお可哀相で御座りますよ」

「いやに同情するではないか？」

「ほんたうに同情されますね」

「猿が、變なことを云ふぞよ」

「變なものですか、なにしろ信長公の上置きに立たされては、まったく誰しも困難いたします。難しうござりますよ。遣りきれませぬよ。あへて義昭將軍ならずとも、あんなふうになるほかないと思はれますね」

「ます／＼訝しなことを申すな、何故だ？」

「なぜかと被仰るのですか？」

「訊くよ」

「それはで御座ります」

と、秀吉は、恭々しく頭を下げて、

「恐れ多くも 一天萬乗の 大君のおはしますのみで御座ります——信長公の上にお立ち遊ばす御方は。——それ以外、誰とても困難でござります、困難なら、無理が出来ます」

「むー」

「そのことです。無理算段は陰謀を伴ひます。おツピらには運べないからです。そこで京都の幕府が陰謀の巢窟みたいに、成らざるを得ないのです」

さう云つて、こんどはベコリと、猿そのまゝなお辭儀をして、

「してみれば、義昭公もお可哀相で——」

(二)

「木下、まだ申すのか」

「館、あなた様ほど我儘な大將はないですからな」

「こらッ！ 我儘だと、ひどいことをいふな！」

信長も、面と對つて、我儘だと云はれては、すこし煙に捲かれた形だ。

まさしく信長を煙に捲くものは、猿面秀吉以外には無いのだつた。

「決して悪い意味では御座りません」

「わるい意味でなくても——俺は我儘ではない積りだ。すくなくとも世間一般の我儘とは、我儘が遠ぶぞ」

「ですから無類飛びツ切りの、我儘でいらつしやる」

「此奴、口の減らんには驚いたな」

「自分の意志のほかには、なんらの權威を認めない男が、館、信長公でおはす。とりも直さず日本一の大我儘者でいらせられる」

「わつは、それが予の、予たる所よ」

「即ちそれが偉大なる、雄渾無比な存在で、いらつしやる所以でござる。で、ございますゆゑ、信長公の良き家來たることは、じつは難しい哉です。全く骨が折れます。しかし、難しさを凌ぎ、骨折りを惜しまなければ、手柄を認めて頂けますが、信長公の上に位するといふことは、絶対に不可能でござります。しかるにですね、義昭將軍は、その絶對的な不可能を、こゝ何年掛りかで、可能にしたし、したい、とあがかれたのです。おもへばお氣の毒なこと御座りましたよ」

「もういゝ、澤山だ」

「館——」

「解つたよ」

「お氣の毒だと申す意味は——」

「解つたと云ふのに、わはつは——」

信長は、氣持よげに、朗かな笑ひ聲を立てた。

すでに義昭將軍へは、十七箇條の諫書を呈しておいたのだつた。

この諫書は、だが、最後の通牒ともいふべき性質を持つてゐた。

將軍の究所々々を、完膚ないまでに衝いて、容赦なく弾劾して（もしこの諫めを聴かずんば、最後の手段に訴へるから、さう思へ！）

と、條理と威嚇とを、兼ねたものだつた。

條々——

一、御参内の儀、光源院殿、御無沙汰について、果して御冥加なき次第の事ふるく、これによつて當御代の儀、年々懈怠なき様にと、御入浴の刻より申上候ところ、早おぼしめし、忘れ、近年御退轉、御勿體もなく存じ候ふこと。

光源院どのといふのは、前將軍、足利義輝のことだ。先代も、尊皇の大義をおろそかにし、畢竟は

そんな心構への浅間しさから、不慮の最期も遂げた。

これをまづ云つて――

おみさまには、御入洛の、抑々から、云はないことではない。私から呉々も、篤と、一天萬乗の、皇室を御大切になさるべき事を、申上げて置いたのに今更、これを、ないがしろになさるゝことは、何事であるぞ！

さすがに、第一條だけあつて、堂々たる、重大な題目を掲げて、信長は、京都の將軍に對つて、一大痛棒を喰はしたのであつた。

信長が、勸皇第一主義者であつたことは、何よりの強味だつたに違ひない。

(三)

一、諸國へ内書を遣はされ、馬そのほか御所望の體、外聞いかゞに候の間、御遠慮を加へらるるが、尤もに存じ候。たゞし仰せ遣はされ候はゞ叶はざる仔細は、信長に仰せ聞けられ、添狀仕るべきの旨、兼て申上げ、その心得の由候へつれども、今はさも御座なく、遠國へ御内書なされ御用仰せらるゝの儀、最前首尾相違候ふ、いづかたにも然るべき馬ども御耳に入れ候は

と、信長馳走申し、進上仕るべきの由、申し舊し候べき、左様には候はで、密々を以て直に仰せ遣はされ候ふ儀、然るべからずと存じ候ふ事。

これが諫書の第二條だ。

馬その他を御所望といつてゐるが、この「その他」が意味深長なのであつた。

なぜかといへば、信長打倒の陰謀が、それに含まれてゐるからだ。

三年前――元龜元年正月に締結された信長と將軍義昭との協約には、義昭から内書は出さぬといふ條項があつた。それを義昭が、まもらなかつたことを、彈劾したのであるが、義昭自身としては、信長退治の元締の位置にあるのだから、秘密指令を四方八方へ出したことは、必要止むを得なかつた。で、これを斷然封じるとすれば、要するに最後の手切れを暗示したことになる。

一、元龜の年號、不吉に候ふ間、改元しかるべくの由、天下の沙汰について、申上げ候。禁中にも御催しの由に候ふ處、いさゝかの雜用仰せつけられず、今に延び延びに候。これは、天下の御爲に候ふ處、御油斷しかるべからずと存じ候ふ事。

元龜四年を天正元年と改元する期日を、のびのびに運らしたのは義昭が、わづかな經費を出し盡つた所爲だ、とさう云つて責めたのである。

一、諸國より御禮申上げ、金銀を進上、歴然に候ふ處、御隱密候ひて、をかせられ、御用にも

立てられず候ふ段、なんの御爲に候哉の事。

だいぶ方々から、金銀を買つてゐる筈だ。相當たんまり懐に入れたことは、歴然として隠れもな
い事實だ。それを匿し込んで、ごく軽少な改元の御費用さへも、出し惜しむといふのは、何事だ？

一體、何の爲に、金銀を使ふ心算か？

と、痛い所へ、釘を打込んだのである。

むろん義昭將軍は、信長退治の軍用金を、せつせと、積んでゐたのだつた。

一、明智、地子錢を納め置き、買物の代りに渡し遣り候を、山門領の由仰せかけられ、預け置
き候ものを、御押への事。

この一條は、明智光秀の買物代金を、將軍が横取りしたのを、咎めたものだ。

一、去夏、御城米を出され、金銀に御賣買の由に候、公方様の御商賣の儀、古今承はり及ばず
候、今の時分に候ふ間、御倉に兵糧これある體こそ外聞、尤に存じ候に、かくのごとき次
第は驚き存じ候事。

信長は、辛辣に皮肉つてゐる。公方様が商賣をするなどいふことは、昔から聞いた例がない。驚
き入つた。呆れかへつたと、書いたのだ。

一、士民百姓に至るまでも、悪御所と申す由に候。なにゆゑ斯の如き御影事を申し候哉、こゝを

以て、御分別まゐるべきかの事。

ほかに十一箇條。

微に入り、細を穿つて 筆路堂々。

(四)

信長が、言々句々すべて、將軍の痛いところを割つた十七箇條を、いま秀吉は、心に思ひうかべて
わた。

「あんなのが、縦横無盡の筆陣とか、いふのかも知れませぬけれど、もし私をして云はせますならば
ですね、あんなのは餘計なお仕事で御座りましたよ。たしかにあんなのは、どうも」

「猿面、あんなの、あんなのと、馬鹿に氣に染まんらしい云ひ方をするではないか」

「氣に入りませぬね、私は」

「馬鹿云へ。あれは抜き差しならん文句だつたぞ」

「どう仕りまして、無上に無駄ばかり多くて、まことに怎うもな」

「なにを云ふぞ。どこに無駄があつた？」

「どこも、かしこも、無駄々々々々で、まるツきり一向宗の、お題目の、南無まい陀、南無まい陀、
みたいで、お話になりは致しませぬよ館」

「痴氣め、予は無名の戦はやりたくないのだ」

「まつたく第一條きりですよ、大義名分は、——ですから、あとは皆んな南無まい陀もので御座りま
すよ。必要のない御題目を、並べるよりか、さつさと、幕府なんぞは叩き潰して、おしまひになる方
がどのくらゐ、信長公らしいか知れなかつたと、さう猿めは思ひますね、はい」

「はッはッ猿だけ思つても、世の中がさう思はないことには、仕様が無いからな。盲目千人に、目
あきは、一人もゐないのが世間だ。なか／＼簡単には行かんぞ」

信長は、苦笑ひするのみで、怒らなかつた。

これが秀吉でなくて、他の者なら、どんなにか酷い見幕で呷鳴つたであらう。だが然し、秀吉でな
ければ、信長に對して、とてもこんなふうには、臆面もなく物が云へるわけのものではなかつた。

「なア、猿面——おれの氣性からすると、かなり今日びの遣り方は、鈍いやうだけれど、甲府の信玄
坊主が、いよく往生したらしいことを、儲めるまでは、うっかり動けなかつたのだ。國へ引上げた
といつても、また何時あばれ出して来るか解らんといふ——その心配の消えないうちは、將軍に對つ
ても、さう一本調子で叩きつけるわけには行かなかつたよ」

さすがに沁々と、信長は云つたのである。

曾ては奔放きはまりなかつた彼も、必要の場合には、水も洩らさぬ用心をするほどに、練熟してき
たのだつた。

「はい、それはもう御尤もで」

「なんだ、急に、神妙になつたな」

「館が、信玄坊主を眞實に死んだものと、お考へになつてゐることが、やつと明瞭しましたので」

「それで神妙に成つたと云ふのか？」

「もう一切、何事も申しませぬ」

「嘘をつけー」

「いえいえ、信玄が此世にゐないのと同様に、本當で御座いますよ」

「はッはッ口から先に生まれた辯に、其方が黙んまりでをれるか」

「居られますとも、無言の行となれば、覺悟が違ひまする」

「仰山にいふぞ。——だが其方もこんどは、一手で小谷封じは、むつかしいぞ。誰でも望みどほりの
相棒を遣はすから、望むがい。誰にする？」

足利幕府の滅亡

(一)

木綿藤吉、米五郎左 掛かり柴田に、退き佐久間

こんな小唄が、そのころ岐阜の城下町で流行つてゐた。

木下藤吉郎秀吉を木綿にたとへ、

丹羽五郎左長秀を米にたとへ、

攻め掛かる先陣は柴田が第一。

退き口は佐久間が巧者だ。

といふ意味なのである。木綿物は無くては叶はぬ必需品だが、米の飯となると勿論それ以上だ。そ

の米に擬らへられた丹羽五郎左の人氣はどえらいものだ。

五郎左は此時、五萬石、江州佐和山の城主だった。

だから同じ江州長濱五萬石の藤吉郎とは、知行所も隣り合つてゐたし、全く雁行の身分であつた。

すると、五角の競争者だ。競争者は、大概、仲の悪いものだが、丹羽と木下の場合は、例外だつた

一方は鐵橋を叩いてみてから渡らうといふ篤實さ——ところが片ツ方は、おツちよこの馴れ者といふ

感じが、まづ先に立つ。正反對といへる性格なのである。それでゐて、仲が良かった。

氣が合つたか怎うかは疑問だが、仲良しのことは確かだ。

「相棒ですか？」

と、秀吉が、寧ろ迷惑さうに云つた。

「誰にする？」

信長は、再び訊ねた。

「要らないだらうとは思ひますけれど、誰ぞ定めると仰しやるなら、五郎左で結構です」

秀吉は、小谷勢は城から出る氣遣ひはないし、越前の朝倉も動かぬと、さう踏んでゐるのだつた。

(たゞ看張るだけなら、三里の長城と、自分の手勢で充分だ)

とは思つたが、——これは丹羽に片棒を、擔がせた方が賢からう、と考へ直した。

「丹羽だけで大丈夫か？」

「わたくしだけで、大丈夫みたいな氣が致しますよ」

「此奴、ばかに甘く見てゐる」

「信玄が冥土へ旅立ちましてはな」

秀吉は、武田の宣傳が、信玄の生きてゐることを、あまり強調しすぎる點で、信玄の死を決定的なものとしてとつたのであつた。

ところが、武田の宣傳をそのまま信用して、

(信玄は生きてゐる)

さう思つたのは京都の將軍、義昭だつた。

(やがて病が治り次第——きつと上洛する。信玄入道さへ来て呉れれば、信玄を倒すことはなんでもないので!)

信長を防ぐために築いた江州石山城と、堅田城を、わづか二三時間で採み潰されて、この三月に一度、没落しかけたことなどは、いはゞ喉もと過ぎた熱さのやうに忘れてしまひ、たゞもう、

(信玄が來たら、おのれ信長!)

胸に首は附けて置かぬぞ——とばかり考へた。

そして、公方の御教書が、無闇に濫發された。

この世にゐない信玄を、あてにしての信長征伐は、心細い限りなのであるが、御當人の公方は、側

近に諫める者があつても耳へは入れずに、

「信玄、信玄!」

と、諺語のやうに叫び續けた。

(二)

將軍の氣持は、疑ひもなく異常な心的状態だつた。

三淵大和守が、慄然として、

「信玄が上洛いたさぬ限り、信長は天下の實力者、實權者で御座ります。さやうに御無闇に、信長退治をおん口走りあそばしても、いかゞかと存ぜられますが——」

と、なるべくやんわりと、宥めるのであつたが、

「えい義昭は、足利十五代の大將軍ぢや、天下兵馬の權を統ぶる征夷大將軍ぢや。信長ごときは、予の眼中に無いわい! チエツ信玄が旗を進めた曉には、信長も岐阜も有るものかッ!」

と、將軍が叫んだ。
「さ、その事で御座ります! 上様は信玄、信玄とお口辯のやうに宣給ふ?」

「大和ツ？ それを悪いと申すのか？」

「もちろんお悪いと存すればこそ御諫めも仕る。もし武田が上洛いたしませぬ隙には——と申したいのは山々ながら、すでに——若しなどといふ假定は許されぬ急迫状態——武田よりも先に、織田は大軍を進めて参つたでは御座りませぬか？」

三淵は叫び返した。

「信玄は必らず、織田のあとを襲つて呉れる。予はそれを期待してゐる！」

「上つ！ その御期待は甚だ御無理かと存ぜられます。武田はあれほど侵入いたした遠江、三河から撤兵して、軍の前衛線をさへ、信州の國境まで後退させたと申します。しかるに織田の大軍は、もはや、洛外に迫つてをりまするぞよ」

「しかし今頃は、大擧して信長の留守の岐阜城を占領してをるかも知れぬ」

「上様つ？ さやうな御寝言めいたことを被仰るもので御座りませぬ！ 承はるのが、斯く申す三淵ならずば、憤りまするぞツ」

「え、憤るなら憤れツ！ 今に信玄が来てみよツ！」

「さ！ その信玄で御座りますツ！ 上は申さば武田病——信玄病みにお罹りになつたので御座ります！ まつたくこれは、御重病、手が附けられませぬ！」

「おのれ無禮な、なにを吐くツ？」

「いや御難症でおはしますツ！ 仰せのごとく信玄が、甲信の精兵を率ゐて、眞實信長の留守、岐阜の城に殺到いたし呉れますれば、これに上越す御僥倖は御座りませぬが、なか／＼さうは御都合よろしく参りませぬぞ」

「たわけツ！ 宜敷く参つたら怎うするツ？」

「これはしたりツ！ よしや左様御座りませうとも、それは遠方、こちらは足元に火が點いてをります。御直参の兵を、幾許ありと思召す？ 朝廷の北面の武士とて、知れた數で御座ります。公家の青侍は、弓矢とる術を存じませぬし、たとひ知つてをればとて、これまた集めても二百か三百あるか無し。洛中、洛外の寺社の兵を擧りましたところで、二千か、三千。なんで織田の大軍に抗し得ませうや？」

「む！」

「上様！」

「信玄の病氣よ、なぜ悪い時にツ！」

と、將軍は叫んだ。

「え、お情なし！ まだ信玄を仰せらるゝか！」

「お、言はずにをれようか！ 信玄さへ病ますば！」
切齒扼腕しつゝも、將軍は、京都を捨て、横島へ、移らなければならなかつた。

(三)

「公方様の、再度の、御謀叛——横島の要害にお立籠りて御座りまする」
注進が、佐和山の城に來たのは、七月五日だつた。

この日は、猛烈な風雨で、風速も雨量も、十数年ぶりのものであつた。鈴鹿山脈の連山から、依然あふれ出た水は、谷といふ谷を瀧のやうに落ちて、野洲川、愛知川、犬上川の川々は、たちまち大洪水となつた。

もし注進が半日もおくれたなら、途中で動きのとれない立往生の憂き目に出會つたらう。どの川も堤防が決潰し、野は沼のやうに水浸しとなり、橋は落ち、渡船は流されて、交通は全く杜絶してしまつたからである。

暴風雨は前日から襲來したのであつたが、五日の夕刻になると、ますます吹き荒れ、降りつゝのるばかりで、何時止みさうもなかつた。

「仕様が無いな！」

柴田勝家は、颱風と豪雨に暗澹と暮れゆく空を見つめてゐたが、

「氣狂ひ天氣めツ！」

と、嗚鳴つた。

そばにゐた明智光秀が、

「天變地異には勝てぬ。天候の恢復を待つほかあるまい」

と、云つた。

すると佐久間信盛が、

「しかし館は、明朝は御出陣と被仰るのだ」

當惑さうな顔である。

明智は苦笑して、

「なんと仰しやらうと、明日明後日はおろか當分は、とても叶ふまい。どの橋も皆、落ちたと申すではないか」

さう云つて、

「のう細川殿！」

と、藤孝を顧みるのだつた。

織田の諸將は、こゝ佐和山の、丹羽の城内に待機してゐたのだ。

大軍は、城下の町から近郷近在の村々に集結して、命令一下いつでも進める姿勢を調べてゐた。

要するに信長は、公方義昭の再舉を、今か今かと、手ぐすね引いて待ち構へてゐたのであるが、待

たれた注進の到着が、この大暴風雨にぶつかつては、どうにも出来ない、と思つたのは旗下の諸將領

で、信長自身は決してさうは思はなかつた。

「久太郎」

「は」

「柴田を呼べ」

「はい」

堀久太郎が、柴田をともなつて、信長の面前に戻ると、

「明朝は、早いから、今夜中に支度をさせる」

「館、支度とは、御出馬の？」

「解りきつた事を訊くの」

「残念ながら、當分はお諦めを願はねば相成りませぬ」

「何？」

「御出馬は御不能で御座ります。犬上橋、野洲川橋、愛知川橋、ことごとく流されたと申します故

急ぎ船橋を架けまするにいたしましたしても、この暴風雨が納まりませぬことには、工事が――」

「えいカサゴ野郎ツ！」

久しぶりで信長の口から出たカサゴ野郎だつた。

(四)

「あ、あなたこそ、カサゴ殿様だ、お、恐れながら、カサゴ館ぢやー」

と、柴田権六は眞赤になつて唳鳴つた。

「こゝの、人並みみたいな音を出すぞ」

憤るかと思へば、ゲタゲタと笑ふのである。

「権六は、権六なみの音を出しますッ！」

こゝツぞとばかり、柴田は聲勵まして、

「どれほど御馬の達者でも――いかに水馬に御練達でも、江州中の川といふ川が溢れ満へて湖水と相

成つたと申すのに、明日早々と御出馬なぞと！これぞ是れ、カサゴ館でなくて、何で在さう？」

「はッは、吠さいた吠さいた！だが權六、誰が出馬すると云つた？」

「え？な、なんと、仰せらるゝ？」

「予は出馬すると云つた覚えは無いぞ」

信長はクロリとした顔で、柴田を眺めたので、

「あ！」

叫ばうにも、すつかり拍子抜けがした時、

「鮎みたいに口を開くな！」

「うう！」

「權六。——予は、たゞ明朝早いと申したただけだ」

「や！拙者が——御出馬のお支度かと伺ひましたところ、解りきつたことをと、仰せられたでは御座りませぬか？」

「さう云つたのは出掛けるといふ意味だ。出陣すると云つたのだ」

「え？」

まるで獨樂のやうに、ぶん廻された形だ。

出掛けるも、出陣も出馬も、この際どこが違ふ？

「權六。——この城から、湖水の汀までの距離は、知れたものだな？」

信長は、妙なことを訊ねた。

「何を仰言ります？當城は、汀に建つてをるでは御座りませぬか」

「だから馬に乗るには及ばんのだ」

「館？」

堪らなさうに、見つめると、

「予は、天眼通でも陰陽師でもないけれど、二百十日の前後ごろはよく荒れるぐらゐの事は解る」

と、微笑しながら、

「なにもハツキリ、この秋は、七月五日に大荒れが来て、江州の橋が落ちるといふ豫感がしたわけではないが、予は五月の末に、多賀山から材木をきり出させて、この佐和山麓まで、勢利川通しで引きおろした。さうして大工の岡又を棟梁にして、長さ三十間、幅七間の大船を造らせた。百挺櫓だ。船首にも船尾にも、矢倉を設けさせた。——權六」

「は！」

「この船が、一昨日、出来あがつたのだ」

信長は、いかにも心地潤然と、

「な、うまく間に合つたものよ！」

「おゝそれで！」

「それで、出掛けるのだ。風が吹かうと、水が出ようと、あの船なら平氣ぢや。琵琶湖を渡つて、坂本へ行く。明智の城には、相當の兵がゐる筈だから、直ぐにも京都へ入れる。だが、そこで様子を見て、荒れの止むのを待つかも知れぬ。まあそこは臨機應變といふことにして、馬は船に積んでゆくから、出馬でなくて、携帯馬ぢや、わはッはゝゝゝ！」

(五)

百挺櫓の大船に坐乗して、信長は暴風を凌いで湖水を渡つた。

豫定のやうに、六日の午後、坂本に上陸して、明智の城に這入つたのであるが、

「左馬助、——日和の恢復と、軍兵どもの到着を、こゝで待つ方がよいか、それともビショビシよに濡れ序に、泥濘を蹴つて一気に京都へ押した方がよからうか——どうぢや其方の考へは？」
と、信長は訊いた。



明智左馬助光春は、光秀の従弟で、文武兼備の達人だつた。

光秀留守の坂本をあづかる城代として、二千餘人の兵を持つてゐた。

考へは怎うかと訊かれたが、左馬助は即答をためらつた。あまりに質問が、唐突であつたしそれよりも、さすがの左馬助が、すくなくらず面喰つてゐたからである。いかに速力第一主義の信長公でもまさかこの荒天を冒して、さながら大海の暴風にも似た湖水の波濤を乗りきつて來ようとは、思ひも寄らなかつた。

(下手なことを云つたら、お眼玉を喰ふ)

わが身が喰らふお眼玉は、いかに大きくとも、硬くとも厭はぬが、殿が——光秀の殿が——

さう思ふと、左馬助はありツたけの能力を働かして、最も適當な返辭を考案するのであつたが、天馬空——颱風を物ともせず湖水を乗りきつて來る信長の前で、長思案は、およそ何よりも禁物ではないか。

と、心づいた左馬助光春が、

「は——」

『どうだ？』

「紅葉の錦——」

と、思ひきつて云つてみると、

「——ほう神のまにまにか？」

速い！ 咄嗟に信長は應じたのである。

「いえ、お氣のまにまに！」

「こゝろ！ 氣まぐれにしると申すのか？」

と、語氣は鋭くても、顔には温もりの微笑が漂ふ。

「はい！ 館さまのお氣まぐれこそ、神の道に！」

と、左馬助が答へた。

「通じると云ふのか、おのれ！ 追従は止め。おれは嫌ひだぞ御機嫌買ひは」
信長の面相には、忽然と憎しみが現れた。

(しまつたかな！)

とは感じたが、乗りかゝつた船だ。

(館もお船で、お突ツきり成された！)

覺悟を咄嗟にきめて、

「お嫌ひは承知で申上げた！」

左馬助は、まさしく背水の陣を敷いた意氣で、

「さりながら、お氣に障りましたならば如何様にも御詫は仕る。光春めは、たゞ御氣のまにまにに御座りまする！」

悪びれず云ふと、

「いゝ度胸ぢや！」

信長は、たちまち機嫌を直して。

「禿頭はすぎた從弟を持つたぞよ」

と、賞めた。

「は！」

もう黙つてゐるに限る。

左馬助は、ごく素直に頭を下げた。

「見上げたぞ左馬！ こんな時は、大がいに諫言めいた事を云ふものぢや」

信長は、入京の先陣を左馬助に命じた。

だが、第二陣も三陣も、いつ後續するか解らないのであつた。

(六)

信長の兵は、まだ降りしきる秋雨を冒して、公方館を圍んだ。

二條妙覺寺——それが信長の本陣だつた。

(この大雨風では——)

と、思つてゐるうちに、公方御所の兵は、いつの間にか、包圍されてゐることが解つたので、慌てた。

しかしいくら慌てゝみても、今更おツつかない。

そもそも初めから、追ツつかないことをやつたのだから自業自得だが、やはり一應は慌てる。だが討死するか、降参するか、それがいやなら、自害の道ほか無かつた。

(あゝ甲斐の信玄公が、御上洛に相成りさへすれば、信長ごとき糞くらへだが！)
噫、なんと、この期に及んでも、武田依頼の業病の發作が、なほ續くのだつた。

しかし發作は發作——自決は自決だ。

武田病の最後の發作中だからといつて、織田兵は容赦しない。

で、已むを得ず、日野大納言輝資、高倉宰相永相といふやうな公家たちは、降人になつて出たし、三淵大和守は腹を切つた。

この三淵大和守藤孝は、細川藤孝の義兄弟で、將軍義昭が、奈良一乘院から還俗した當時以來、藤孝と共に、陰になり、日向になりして、輔佐と擁護とに努めてきたのであつた。

だが、細川は、いかに度たび諫めても、義昭が信長打倒の野心に執着して、どうしても悟る氣色のないのに愛想づかしをして、もはや信長に對して公方を、取りなすことを止してしまつた。つまり純然たる織田の幕下になつたのである。

細川の、この態度は、決して功利的なものと譏らるべきではなかつた、なぜかといへば、信長は公方にむかつて、暴戻なことは一つもしなかつた。酷いことを企らんだのは、信長ではなくて公方だつた。義昭の陰謀は、どれだけ信長に、手を焼かせたか。細川が、足利を見限つたのは、むしろ當然だつたらう。

けれども三淵が、最後まで足利への節を曲げなかつたことは、賢愚は別として、立派な態度であつたには違ひない。

それは兎も角も、義昭將軍の運命はきはまつた。

信長が、横島へ迫つた時、後續の大軍もすでに到着して、つきつきに宇治川を押し渡つた。

七月十八日の午前十時だつた。

出水の水嵩は、まづ餘り減つてゐなかつたが、諸勢は横島の川上と川下から、激流を越えて群々として取り詰めた。

義昭も今は、

『一命を乞ふほかあるまい』

と、いつた。

どう問擡いても、うまい考へが出てくる筈はない。

柴田が、

(館は、お赦しにはならぬだらう)

さう思ひながら、

『いかに?』

と、訊ねた。

そばにゐた明智も、

『義昭公方の御一死なほ足らずではござりませぬか。叡山のことも、姉川の合戦も、みな公方から發した儀でござりますすによつて』

と、いつた。

(七)

明智は、誰が何と云つても館は公方の助命を、諾と云ひはなさるまいと考へた。

(公方の御一命は、お助けに相成る方が、もちろん宜いのは明らかだが、——) 自分はさう感じて、信長の心を推し測つてみるとこゝで、反対意見を發表するのはなんの役にも立たないで、たゞ自分の損であることに氣づいたのだ。

明智も近ごろは、よほど、信長に對する研究が出来てゐた。いろんな苦い経験のおかげだつたらうが、叡山焼打に反對の諫言をして酷い目に逢つた轍は、二度と踏みたくないと思つた。

だから、なるべく信長と同じ見方、同じ考へ方をして、物を饒舌りもし、行動もしたいと考へるやうになつてゐた。

しかし、これは明智にとつては決して愉快なことではなく、或る時は、身を斬られるよりも遙かに辛かつた。物を見る目の視角を、信長と合はせることは、猿面秀吉なら、いかにも明朗にやつてのける所を、これが明智となると大層な苦痛だ。

齒を喰ひしばるくらゐなら、まだしも、熱湯を飲む時みたいなの、表情をすることさへ有つたのである。

で、今の場合は、——それほど苦惱したわけではなかつたが、兎に角、信長の氣持を忖度して、

「公方は此際、おん腹召さるゝが當然かと存じますか？」

と、云つた。

「ふゝゝ光秀の禿頭めが！」

信長は微笑した。

だがこの微笑では、明智の言葉が、氣に入つたのか、入らないのか、どちらとも判らなかつた。

「御意は、なんと御座りませう？」

「今更、といふ感じだな」

と、信長が呟いた。

「御意に御座ります」

明智が、相槌をうつと、

「もつと早ければな」

眼が、皮肉に光る。

でも明智は、もつと早ければ命乞も聞いてやらうが、といふ意味にとつた。

これは明智でなくても、さういふ意味にとつたらう。公方が今更助命を乞ふのは、餘り蟲が好き
た話だ。

にも拘らず、信長には何か別な考へがあつたらしく、

「藤孝を呼べ」

さう云つて、細川藤孝を召した。

細川は公方家への誼を棄て、暗涙を呑みながらも、横島攻めには、先陣をかけて、世嗣の熊千代
忠興を十一歳で初陣させた。いま眼のあたりに、宗家でもあり、譜代の君公でもあつた足利氏の末路
を見ては、うたゝ感慨の愴々と昏悲しいものが、胸一ぱいに溢れるのであつた。

信長は、藤孝の顔を見るとすぐ、

「お許の本家も、もう是迄だ」

と、云つた。

藤孝は、愁ひ貌を、とり繕はうとはしなかつた。

「足利が、みづから掘つた墓の穴で御座りますゆゑ」

「お許には氣の毒だが、藤孝」

「は！」

頭を垂れた藤孝は、

（公方に、御自害をすゝめよ、と仰せなのであらう）

と思つた。

(八)

（あゝ萬止むを得ないことだ）

藤孝は、觀念の眼を閉ぢた。

（信長の館が、公方に死をお與へなざることとは、斷じて非理ではない。せめて、あの十七箇條の諫書
が呈出された直ぐ後に、公方が靦然と前非の數々を悔いられて、ふたゝび剃髮して佛門にお入りにな
るとでもいふなら、自分も極力、お命乞ひもしたであらう。むろん御怒りになれば、冷酷水霜より
も凛烈で、ひとたび罰するや、利刃の水を截るよりも更に斷乎として速かな信長公ではあるけれど、
あの時なら、まだまだ公方のお命一つをつなぐべき脈は、必ずや有つたらう。だがすでに、今となつ
ては、止んぬるかな。藤孝お許には氣の毒だが、お許の本家も是迄だ、とさう仰しやつたではない

か！)

文學者といふものは、感情が動じやすい。多感であり、敏感であるがゆゑに、文學を嗜むのでもあらうが、細川藤孝は、文學者だから、こゝで不覺の涙を流してしまつた。

彼くらの聰明で、時勢を解し、政治を知る人物なら、もし彼が文學者でなく、詩人でなく、また歌よみでもなかつたとすれば、いまこゝで泣きなどはしなかつたらう。

信長は、藤孝の眼から、涙が流れ落ちるのを見た。

「氣の毒だとは云つたが、泣くには及ぶまい」

「は！ 恐縮でござります。愚しい落涙でござる」

「藤孝、お許は、十二代將軍義晴の落胤だといふから、公方とは實の兄弟だ、と、すれば、泣くのは道理だと人は云ふだらうが、信長は云はんぞ、どうぢや解るか？」

「館！ 理性では制御まゝならぬ愚痴でござりまする」

「はツは、流石うまい文句を吐くぞ」

信長は、笑つたが、

「お許に委すから、どこぞ寺へ片付けて呉れ」

と、云つた。

「公方御生害後の亡骸を——で御座りませうか」

藤孝が、涙を拭つた顔を擡げると、

「いや違ふ。生身の取片附ぢや」

「や？ なんと仰せられます」

「どこか近所の寺で、二度目の坊主に、——坊還りをさせる、と云ふのだ」

「おう！ 然らば公方の御一命を？」

と、おぼえず叫んだ藤孝は、さつきから何か聞き違つてゐるのではないか、といふ氣がするのだつ

たが、信長は、

「なにもさう、驚かずともだ、今更あの人の命を縮めても、格別意味はなからうから、助けるよ」

「おゝお助け下さいまするか？」

聲が、感動にうち顫へた。

「む、坊還らせて呉れ」

信長は、藤孝を榎島城内へやるために、促して座を立たせた。

藤孝は恩命に泣けてきた。またも涙が頬を濡らした。

見送つた光秀は、親友細川の心のなかを想ふと、これもまた一種の安堵から、そゞろ目がしらの熱

くなるのを感じた。信長は、この劃畫的な場面を自分で主宰しながらも、ふだんの冷靜を失はずに、
 「藤孝には、公家の出来損ひみたいな所が、なかなか除れんよ」と、云つた。
 柴田が、頭を下げた。
 「館！それでこそ寛仁大度の御名君！」



東京市神田區淡路町二ノ九
 配給元 日本出版配給株式会社

(日本出版文化協會會員登録番號112124)

昭和十六年七月廿八日 第一刷印刷 昭和十六年七月卅一日 第二刷發行 織田信長(第五卷) 〔定價金壹圓八拾錢〕	
著者 尾 雨 工 東京市神田區區吳服橋二ノ五	發行者 神 田 龍 一 東京市牛込區矢來町三六
印刷者 本 間 淳 三 郎 東京市牛込區矢來町三六	印刷所 清 揚 社 東京市神田區區飯田町一ノ一六
製本所 河 手 製 本 所 東京市神田區區吳服橋二ノ五	發行所 春 秋 社 松 柏 館 東京市日本橋區區吳服橋二ノ五 電話東京二四八六一番 電話日本橋二六二四番

(小社發行書籍中、落丁等の不完全品があり、
 した節は御申出下さい。早速御返致します。)

小歴史 安土・桃山（全十二冊） 鷲尾雨工著

織田信長

名取春徳畫伯装幀
B6判本綴美麗カバ付
各冊平均四〇〇頁
定價一冊壹圓八拾錢
(十十四錢)

安	第一卷	狐々馬
土	第二卷	人質交換
編	第三卷	桶狭間
(冊七)	第四卷	岐阜
	第五卷	足利滅亡
	第六卷	中原布武
	第七卷	本能寺

安土・桃山！それは信長、秀吉の二名將二政治家によつて近代日本が統一國家への巨歩を踏み出した最も輝かしい時代だ。雨工の逞ましい歴史眼と、鋭い氣魄の創作力とは、この時代と人とをまさまざと描き出して歴史小説の一大エポックを作つた。

春 秋 社 版

桃	第一卷	小牧陣
山	第二卷	聚落第
編	第三卷	淀殿
(冊五)	第四卷	桃山城
	第五卷	關ヶ原

の惱みを惱み抜く現代日本への絶好な贈り物と確信する。全目次が示す如く、信長の狐々馬時代から桶狭間、中原布武を経て、本能寺の悲劇に終る迄のこの英雄の全生涯、小牧陣から關ヶ原陣に至る迄の、秀吉とその一家の興廢、而もそれは正確な史實を基礎としての小説だ。文學は斯くありてこそ、眞の文學と云へよう。

春 秋 社 版

豊臣秀吉

名取春徳畫伯装幀
B6判本綴美麗カバ付
各冊平均四〇〇頁
定價一冊壹圓八拾錢
(十十四錢)

小歴史 安土・桃山（全十二冊） 鷲尾雨工著

吉野朝太平記

名取春徳監伯裝
各册四六列本綴
平均五〇〇頁
定價各卷圓五拾錢
(千十四錢)

埋もれた南朝の英傑、楠正儀の孤忠を描いて、六百歳の後にその
宛を雪ぎ、楠氏三代の忠誠を全からしめた大歴史小説！

(全六卷)

著工雨尾鷺

- 第一卷 楠正行と正儀
- 第二卷 正儀策謀ノ一―師直の死
- 第三卷 直義の死―正儀の京都回復
- 第四卷 北朝三上皇の南遷
- 第五卷 再び復す帝京の地
- 第六卷 親房と尊氏逝く

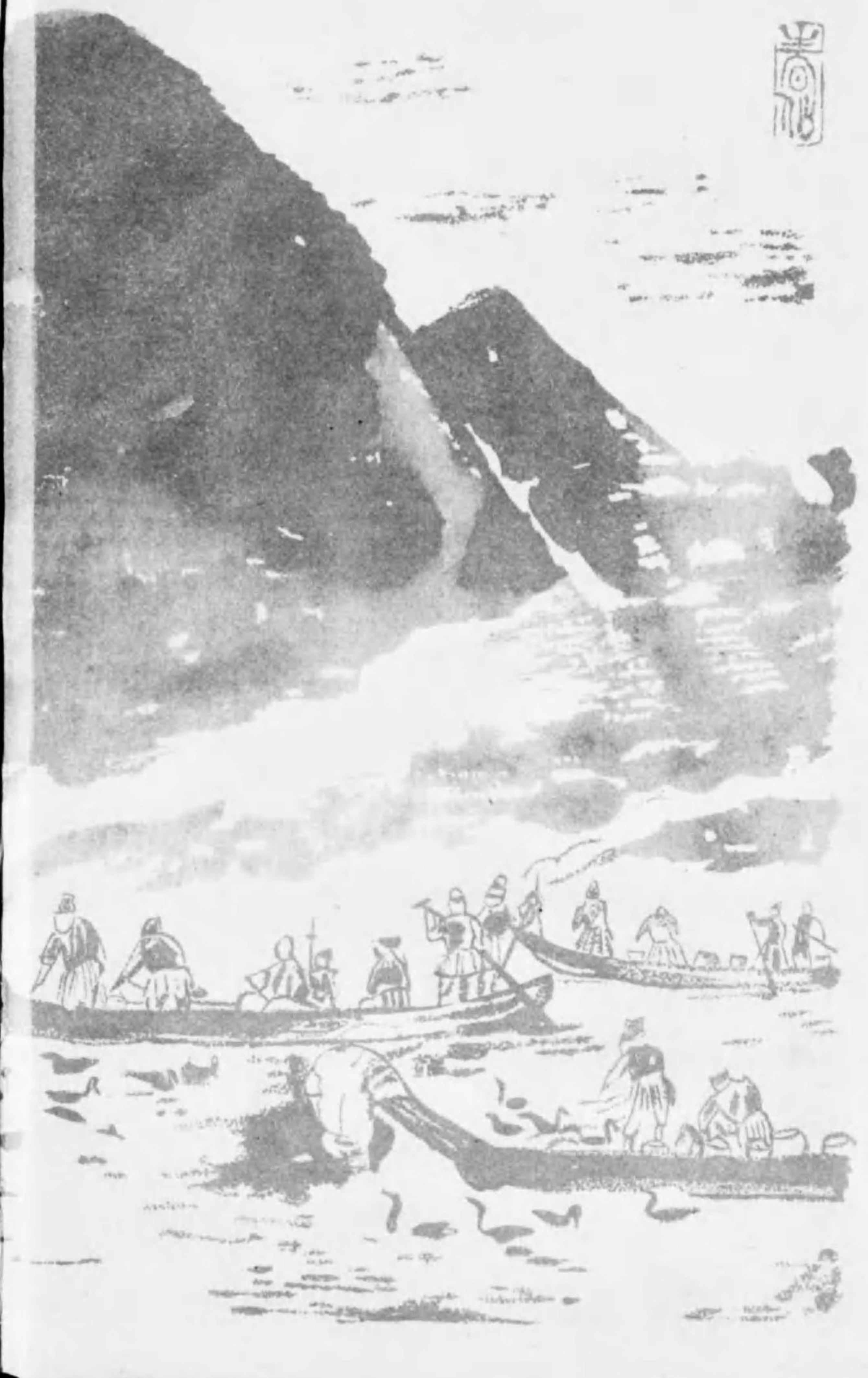
古への國難を描いた本書がより大なる國
難―日本及び東亞の歴史的一大轉換に際し
崇高なる日本精神を示唆し、國民を根柢より
覺醒せしむる機縁となつたことは、偶然とは
云へその功績は頗る大きいと云はねばなら
ぬ。構想の雄渾、描寫の精緻、作の
中軸を貫くものは嚴肅な皇道精神で
あつて、讀むものは何人も此の尊嚴
の前に襟を正すであらうし、若き英
雄正儀と、老いたる准后親房の痛ま
しい悲劇の前には何人も涙を吞むで
あらう。

春 秋 社 版

410
28



410



終

5

